
最後に私は私は最後に

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後に私は私は最後に

【Nコード】

N3338I

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

今日から私は日記というものを始めようと思っ。

(前書き)

テーマ「ミステリーっぽい短編」

変な形式の作品です。日にちを計算してもらった後、タイトルを注意深く読んでみてくださると、少しだけ気分よくなると思います。

『ああ、この作者馬鹿なんだな』みたいな(笑)

二月一日

今日から私は日記というものを始めようと思う。お母さんが言うには、日記とは字のごとく毎日の日々を書き記す物らしい。

二月二日

二が二つ並んだ。この文章でも二つ並ぶ。特に意味は無い。

二月三日

二日前の日記が失敗だったので、友達に「日記ってどうやって書くの？」と質問をした。友達は「その日あったことを書けばいいんだよ。でも、たまに三日坊主になっちゃうんだよねー」と言った。その言葉通りにしたらお母さんが言っていた毎日の意味が無くなってしまうので、日記の中では今日は二月三日だ。私は助言通りにしただけだ。そこは許して欲しい。

二月四日

日記を書いた。

二月五日

日記を書いた、と書いた。

二月六日

日記をお母さんに見せた。瞬間、ひっぱたかれた。こんなものは日記とは呼べないらしい。意味がわからない。この日の夜は、体中が痛かった。

二月七日

ショッピングに行った。友達が「あーこれかわいいー」と言った。私はそれがかわいいとは思えなかった。素直に「かわいくないよ」と言ったら、友達は悲しそうに「じゃあいいよ……」と言いながら元の場所にそれを戻した。それはロングのスカートだった。結局友達に季節外れの麦藁帽子を買った。経緯は覚えていないから書けない。

二月八日

日曜日。国民的アニメというものを見た。日常を描いていたが、共感出来なかった。つまらない。これのどこが日常なのだ？ これは日常では無いだろうか？ お母さんがこんなに優しいのは、日常では無いではないか。こんなものどが面白いのか、明日友達に聞くことにしよう。

二月九日

私にはお母さんがいる。私にはお父さんがいた。私には妹がいた。私には家族があつた。今はあるのか？ と聞かれたら迷わず私は「無い」と答える。

二月十日

楽しい一日でした。楽しい家庭があり、お母さんとお父さんはラブラブで、妹は彼氏と一緒に登校しました。私も早く恋人が欲しいです。太陽が輝いていました。花が綺麗でした。世界は美しいと思いました。でも、一番美しいのは家族だと思います。私はそれを今日の朝、気付きました。

二月十一日

とある理由で日記が書けなかった。体中が軋むように痛むが、頑張って今日も書こうと思う。しかし、このページの前を見てみたが、何だこの日記は。有り得ない。こんなものは日記じゃない。私はそれを破り捨てようとした。だが考え直し、恐くてやめた。

二月十二日

男子に告白された。体育館の裏の一目のつかない所だった。私はそれを断った。当たり前前だ。何で私が男子と付き合わなければならぬのだ。考えただけで吐き気がする。

二月十三日

この日記は今、ある人の監視下に置かれている。确实だ。机の上に置いていたのに、さっき見たら椅子の上に置かれていた。どうすればいい？ 明日、友達に聞くことにしよう。しかし、私は友達に頼りっぱなしだな。何故だろう？それすらもわからない。

二月十四日

友達の助言通り、日記をある人にはわからない秘密の場所に保管することにした。ここならばれない。明日からはちゃんとした日記を書くことにする。

二月十五日

起きた。食べた。動いた。風呂に入った。寝た。

二月十六日

友達が死んだ。事故でも無く、自殺でも無く、他殺らしい。誰があの子を殺したのだ？ 友達がいなければ、私は何をしに学校へ行けばいい？ わからない。友達に聞きたくても、その友達がいない。もう、この世界にはいないのだ。お父さんと妹以外で初めて、この世の死という物に触れた気がした。

二月十七日

友達の母が家に来た。母は泣きながら、私に手紙をくれた。どうやら、友達の遺言らしい。母を見送った後、手紙を読んできた。最初にこう書かれていた。「私、もう死んだんだよね？」

二月十八日

友達の母や先生やクラスメイトや近所の住民やらに話しを四日かけて聞いた。友達はどうかやら大分前からストーカー被害にあっていたらしい。遺憾だ。彼女を殺したのも、多分そいつだろう。そして、私は多分そいつを知っている。

二月十九日

私は悪い子私は悪い子私は悪い子私は悪い子私は悪い子私は悪い子私は悪い子私は悪い子（以下略。本来の日記ではこの繰り返し返しが数百にも及んだが、直接には関係無いので削除させて貰う）

二月二十日

友達を殺した犯人がわかった。昨日、その犯人に問い質したら、包丁で殺されそうになった。証拠が欲しい。犯人を犯人と特定出来る証拠が。

二月二十一日

証拠が見つかった。じっくり考えたら簡単なことだった。それは、友達の遺言に書いてあった。灯台もとくらしと言っやつだ。漢字は知らない。犯人は犯人ではなかった。犯人は真犯人だった。どうやら私は勘違いをしていたらしい。今回の事件では、犯人は犯人ではない。

「私、もう死んだんだよね？ だったら犯人は私に付き纏ってた人よ。（中略）私は黙って殺されることにする。何故かって？ それはあなたが一番よくわかっているでしょう？ いや、わかっている欲しい。これが私の出来る最後の行動だと思って受け止めて、下さ

い。愛しています。あなたはそうじゃなかったかもしれないけど、私は死んでもいいくらい、あなたを愛しています。あなたをあの世界で待っています。お母さんをどうするのかはあなた次第よ」（西山茜の手紙から一部抜粋）

二月二十二日

真犯人と話しをした。私の言葉と、友達の手紙で真犯人は自白した。ストーリーをしていたのは何故かと聞くと、恋人が出来たのが恨めしかった、私への愛情が何処へ行ったのか知りたかった、らしい。意味不明だ。警察に引き渡した。これで私の仕事はおしまいだ。そして、これで私と友達との繋がりは無くなってしまったことになる。それは、嫌、だ。私の生きる為の糧が無くなってしまふことと同じではないか。

二月二十三日

考えに考えた結果、今日で一端、日記を終えようと思う。これから私はお母さんと話しをしなければならぬ。今までのことと、これからのこと。幸い、私にはお父さんと妹の過去という切り札がある。今、使うべきだ。友達がいなくなった今になってはもうそれしかない。私は生きてる意味がない。どうやら、私は友達のことを愛していたらしい。この感情が多分それだ。よし。準備は整った。私は違う。自分はこれも違う。僕はしっくりこない。やっぱり、日記はよくわからない。最後にそう考え、俺はお母さんに話しをつけに行く。それではまたいつか、会える日を明日待っています。

(以上が西山茜、進藤千春、進藤翔、進藤美千代、四者の殺害事件における極秘参考資料である。進藤美千代を殺害したと思われる進藤亮の死体を発見。捜査を打ち切る。現場には、血で染まった麦わら帽子が落ちていた)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338i/>

最後に私は私は最後に

2010年10月20日19時50分発行